

	<p>第 134 号</p> <p>〒733-0032 広島市西区東観音 8-10</p> <p>ワールド・フレンドシップ・センター</p> <p>理事長：森下弘 館長：ドン&amp;ポーリン・ヘス</p> <p>TEL (082) 503-3191</p> <p>FAX (082) 503-3179</p> <p>E-Mail <a href="mailto:wfchiroshima@nifty.com">wfchiroshima@nifty.com</a></p> <p>URL: <a href="http://wfchiroshima.net">wfchiroshima.net</a></p>
---	---

## PAX アメリカへの旅

山下美枝子

ワールドフレンドシップセンター派遣 PAX2006は、9月11日から10月3日まで三週間のアメリカ訪問でした。滞在中は全面的に WFC アメリカ委員会のご厚意を受けました。チーム構成は、長崎の小峯さん、広島の高江さん両被爆者、大学院生の上山さん WFC と長い付き合いの山下の4名でした。訪れたのは、ワシントン DC、オハイオ州のアクロン、インディアナ州のノースマンチェスター及びゴーシェン、オハイオ州ブラフтон、イリノイ州のエルジン、そしてワシントン州のシアトルと東から西への横断でした。

今回訪問の目的は：

- \*広島、長崎のメッセージ、核廃絶と戦争の悪、むなしさを訴える。
- \*アメリカのピースメイキングの実践と努力を学ぶ。
- \*何かを変えようと努力している人達と膝を交えて会話をする。
- \*日米双方の平和への努力、友情、架け橋をよこびあう。

三週間実り多く多様な経験をし、あふれんばかりのアメリカンホスピタリティを実感する旅でした：一人分の料理の量に眼を見張り、広大な庭の中の大きな邸宅、息を飲むような夕日、又エルジンでは竜巻警報が鳴り響き雨が小止

みになった時現れた二重の虹、全てが感動的でした。しかしなんといってもメノナイト、ブレザレン、クエイカーの平和教会の人達、教会の平和と正義の為の地球規模の実践的活動とその組織力には圧倒される思いでした。アメリカでは平和活動は殆どがクリスチャン、彼らの平和への熱意は掛け値なしのほんものとおもいます。私は、神への信心熱く宗教心の厚いと言われるブッシュ大統領の事を思っていました。

DC のキャピトルヒルを見学中、ホワイトハウスから3ブロックの所に張られた「キャンプ・デモクラシー」のテントに出くわしました。アメリカの現政権への強い怒りと不満、平和と正義のためにブッシュ大統領を引きずり下ろしたいという良心的アメリカ人の並々ならぬ決意をそこでみました。

滞在中、家庭での10人前後の「ファミリーフォーラム」から50人から100人もの教会、学校でのチャペルや集会まで大小合わせて30回程度は話す機会がありました。インディアナ州のゴーシェン、オハイオ州ブラフтон、そしてワシントン州のシアトル全域で、小学校から大学まで数多くの学校訪問をしました。ゴーシェンの、ベサニースクールピースクラブメンバーの具体的活動に——中南米からの兵士に戦闘訓練を施すというスクールオブアメリカの監視——また、ブラフтон小学校の9月21日の

ワールドピースデー行事や、シアトルのカントリーデースクールで出会った小学生達の生気漲る瞳に勇気付けられる思いでした。将来のピースメーカーを約束されたようで。シアトルでは、「1週間で300人以上の学生に平和の種を蒔いたよ、その一人一人が家族、友人にその輪を広げてくれるだろう」とホストのラリー・シムズさんが言うてくださり元気づけられました。

ノースマンチェスターでは、WFC 前館長達にお会いでき無上の喜びでした。非暴力紛争解決の教育、クリスチャン・ピースメーカーチームその他様々な平和活動グループの方達とも共に語り合えました。ゴーシェンで、エルジンで、シアトルで、ホストファミリーは友人、知人、平和活動家達、息子や娘の家族達を招いて家庭フォーラムを催してくださいました。楽しい膝を交えての話し合いの場、今回の PAX が目指していた形なのでとても嬉しく有りがたかったです。

メノナイトセントラルコミティ(MCC)訪問では、平和と救援活動の実践を目の当たりにしました。日本には無いその組織力、信仰に基づくボランティア活動の力強さが羨ましかったです。学校訪問では共通して感じた事があります。人種、文化など多様性を教える事により地球市民であるとの自覚を促すという教育の意図です。皮膚の色、宗教、人種などあらゆる差別とは無縁の人間を育成する努力、裏を返せばその必要に迫られているのがアメリカ社会、ともいえます。

私達は広島、長崎のメッセージをアメリカの人々に伝えました。私は、それは歴史になってしまった事ではなく今日の問題である事を強

調し、同じく危険な DU 兵器の事を語りました。堀江さんと小峯さんのデュエットが上手なので、チームメンバーはオーディションで選んだのかと質問した人がいたのは愉快でした。

私のメッセージは：平和の文化が広がり支配的になれば、戦争の文化は必然的に縮んでいく。地域を、世界を平和の文化で染め上げるには、一人一人が強い戦争否定の意志をもつこと。

WFC アメリカ委員会始め、ホストファミリーの方々への感謝は言葉に尽くせません。本当に有難うございました。



ワシントン DC



ワシントン州 シアトル

## アメリカの遊説への思い

### 小峯秀孝

今回のアメリカの旅は、私にとって忘れることの出来ない毎日でした。

七家族の皆様が笑顔で迎えてくださるし、本当に親切に頂きました。又、皆様の自慢できる観光地へ案内して頂き、その風景の美しさに帰りたくないような気持ちになりました。グルメも美味しくご馳走になりました。家庭でも白米に味噌汁のもてなしを頂きました。

講話回数30回、原爆投下による惨劇だけにとどまらず、命の大切さ、平和への思い、核廃絶等、学校(初等、中等、高等、大学)、大人、パーティーなどでも話す機会がありました。その場に応じた話し方です。

シアトルではラリー、ジョアン、シムズ様方には1週間の滞在でした。どの集会でも皆さん真剣に聞いてくださったようです。シアトルでは、私の話しに感動されたのか、シンガーソングライターの方が徹夜までして私の曲を作って下さり、教会で奏でてくださいました。私は英語を理解する事が出来ませんが、心に染み入る曲でした。

シムズ様が「こんな機会は大切だから、平和運動の輪を広げなければいけない。友人知人へ話し、貴方の話す機会を作りたい」と言っておられ、ハプニングもありましたがアメリカに来て良かったと心から思った旅でした。

ワールドフレンドシップセンターの皆様にご心より感謝いたします。

## PAX プログラムに参加して

### 上山耕平

私は前回の韓国 PAX にも参加しましたが、今回は3週間以上もアメリカ各地をめぐり、多くの発見をしました。アメリカでたくさんの方が、平和に関する運動に参加していて、日本人も

頑張らなければならないと大変勇気付けられました。

アメリカの平和団体を見てもっとも感じたことは、それぞれの団体に必ず若者が参加していることです。それはつまり、若者が平和に関心を持ったときに、身近に参加できる活動があるということです。特に教会や宗教団体が中心となって、そのような活動の機会を提供していました。

私は今年の夏に、2つの大きな国際大会の運営にかかわりました。そこには広島で平和に関心のある若者が多く参加していました。平和に関心がありながらも、いったいどのように活動をしていけばいいのか。ほとんどの若者が暗中模索の中、それぞれのスタイルで平和活動をしています。シンポジウムや討論を中心に活動するグループ、スポンサーを見つけチャリティーマラソンをするグループ、イランとの交流を中心に映像機器を駆使するグループ。既存の平和活動には限定されない、新たな若者の平和活動がある一方、それぞれのグループの交流が少なかったり、既存の平和団体との交流がなかったりと、問題も多くあります。すべてが一つにまとまる必要はありませんが、より緊密な各団体・各世代の交流が必要です。

アメリカの平和団体では、イシュー以外のまとまり、つまり教会が仲介しているので、世代やイシューを超えた交流の機会があります。日本や広島の平和活動で、そのような場ができるのでしょうか。それは宗教なのか、そうでないものなのか。私自身の意見ですが、日本や広島における平和運動での世代間の分断は、想像以上に大きなものであると思います。若者がより主体的に活躍できる平和運動が、日本に求められていると感じます。日本の若

者が政治や平和に関心がないと言われて久しいですが、決して関心がないわけではありません。既存の平和団体が、若者の活動できる場を提供してこなかったからこそ、関心があってもその機会をそがれてきたのです。その証拠に、広島若者は自分たちで平和活動を始めています。関心がない、平和活動ができないというのは、勝手な思い込みです。若者の平和への関心を支援できる環境が、日本や広島にできたら、どんなすばらしい平和活動ができるでしょうか。決してアメリカにも負けなくらいのもになるでしょう。私は、そんな環境が整備されるといいなあと思ひながら、また自分よりも先の世代が、そのような環境の中で平和活動ができるように、その場を作る側にならなければならないと思います。アメリカの実情を見たことで、それをうらやましく思い、同じような場を作らなくてはと焦りも感じました。

今回、このようにアメリカ訪問の機会を与えていただき、本当にありがとうございました。日米の平和交流とともに、今後の平和活動にも貢献できるよう邁進いたします。

### 微笑みに満ちた人達に迎えられて 堀江 壮

最初に3週間にわたり、米国で心からおもてなしいただいたかたがたと日本側の関係されました皆様へ心より御礼申し上げます。米国空港におけるセキュリティチェックのあまりの厳しさに大変なストレスと不快感を持った私達をどちらに行っても微笑みに満ちた大勢の方々にお迎えいただき、ほっとすると同時に米国政府の長年やっている事とのギャップを考えさせられました。同年の広島・長崎被爆体験者が2人と言う以外は、共通点のない異なる人生を過ごしてきた4人が、それぞれの視点からの平和への思いを約30回も学校や教会

やホームステイさせていただいたお宅でお話させていただいた事は、大変幸せかつ貴重な経験でした。米国に心から平和を望み、しかも実際に世界中に出かけてさまざまな取り組みをしておられる人々が大勢いらっしゃる事がよくわかりました。いずれの場所でも心こもった歓待をしていただきありがとうございました。

私は世界の人口はドンドン増えているのに、1人当たりの穀物生産量は1980年代からすでに減少し、取り巻いている環境は地球温暖化、砂漠の増加、耕地の減少、核汚染地域の増加など厳しさを増し、さらに私たちが使っている資源はエネルギー資源をはじめとしてあと何年使えるか先が見えてきている。こうした状況にあって人類は戦争をしてよいのだろうか？とできるだけ数字を示して問いかけてきました。

しかし現実には米国を筆頭に世界中には軍需産業で働いている人たちが沢山いることもどうしようもない事実です。ぜひ皆さんがたの手で地球に優しい平和な産業を、軍需産業に働く人たちが転職できる仕事を造ってほしいと訴え、話し終えました。かの地の新聞にこの点が掲載されたことも大変うれしい思い出です。

毎回通訳していただいた山下様 KYLE様には感謝の気持ちでいっぱいです。私のつたない英語ではとても心からの思いを伝えることは出来なかったと思います。今回の経験を私のこれからの人生に生かしてゆきたいと思ひます。中宮寺の門前に掲示してあった言葉：

「施して報いを求めず 受けた恩は忘れず」  
もしいつの日か広島を訪ねてきた米国人のなかに、私の名前(SOH 大変簡単で覚えやすい)を覚えておられる方とお会いになりましたら、すぐお知らせくださいますようお願いいたします。ありがとうございました。

## 思い出の広島 アンドリア・ガイガー

1967年、私の両親ウォルトンとニコラ・ガイガーは家族を伴って日本に来て、ワールド・フレンドシップ・センターで働く決意をしました。母はその年の秋に広島に着き、父と妹と私は1968年の2月に来ました。およそ40年ぶりの2006年の11月に、広島を訪れ、WFCに宿泊しました。私達がかつて住んでいた南観音町の家とは、もはや違っていましたが、未だに息づく精神は昔のままなのが分かって、嬉しく思いました。現在の館長のドンとポーリンに会えたのは喜ばしいことでした。父の元教え子の山根美智子さんや、私の家族を覚えていた木戸マサコさんと、私達が住んでいた元の場所を一緒に探したりして楽しい時間を過ごすことができました。広島ほとんどの場所がそうであるように、この何十年の間に南観音町も劇的に変遷しました。残念なことに元のセンターもとっくに無くなっていました。1960年後半、あたり一面ネギ畑だった場所も、お店や新しいアパートの建物に取って代わっていました。もっとも際立った変化は、樹木がとても大きく成長したことです。1968年は広島にはそんなに高い木はなく、建物も3階か4階以上のものはあまりありませんでした。今では、たくさんの商店のモダンなビル沿いに、高くそびえる樹木が大通りを覆っています。原爆資料館の原爆の惨状を伝える当時よりもより効果的な展示を通じて、原爆が落ちたことで亡くなった人達のことはまだ忘れられていないけれども。もし私の両親が、広島が再び活気ある、生き生きした町に生まれ変わっているのを見たらどんなに感激したことでしょう。

バーバラ・レイノルズが海外に行っている間、WFCで館長として働くために家族とセンター

で暮らした私の母ニコラ・ガイガーが、晩年を過ごしたカリフォルニアのサンタ・クルーズで、2006年の7月31日に永遠の眠りについたので、広島に戻って来るということは、なおさら感慨深いことでした。母も父も1960年代の初めにクエーカー教徒になりました。父はずっと以前に、1976年の8月に亡くなっています。二人とも自分たちの戦争体験から、クエーカー派の真髄である平和主義と非暴力の教義に惹かれたのです。母はドイツのハンブルグに生まれ、空襲や戦時下の状況で自分の長男も含めて家族全員を失い、残ったのは2人だけでした。私の父はアメリカ人で、第二次世界大戦中若き科学者としてマンハッタン・プロジェクトに関わりました。しかしその目的を知ると、8ヵ月後に機会をとらえてそのプロジェクトから退きました。ただ、他の人間を殺戮するための研究になんらかの貢献をしたことをいつも後悔していました。それで、広島に来て、広島の人々のために彼の人生の一部を捧げる機会を持てたことは、父にとって大いに意義深いものでした。脳の研究や、ストレプトマイシン（抗生物質の一種）の発見などという大きな功績にもかかわらず、とても謙虚な人で、ペンシルバニアでの生化学研究者としての仕事を投げ打って広島に来て、家族を支えるため、また母がWFCの館長として仕事に専念できるように、YMCAで英語を教えました。

両親がWFCにいた時に着手した活動の一つは、基町で毎週土曜日に数時間、英語を習いたい人には誰にでも、お金を取らずに英語を教えることでした。その当時基町は広島でも最も貧しい地帯でした。私たちは土曜日の午後にWFCのスタッフと共によく通ったものです。妹のベネッサと私は、その目的のために借りていた小さなホールの片隅で、少しでも英

語の言葉を学びたい子供たちと英単語ゲームをして遊びました。大人たちはその部屋の片側で年長の生徒たちと英語で会話をしていました。両親は、その当時この地域に住む人達がアメリカ人が喋る英語を聞けるこれが唯一の機会だと私たちに説明してくれました。私たちの努力によって、子供たちや若い人達に英語の語学力を磨くための他では得られない機会を与えたいというのが両親の願いでした。またある時は、WFCのスタッフと岩国にあるアメリカの基地へ、ベトナムに平和が訪れるよう祈りを書いた紙の花を配布するために出向きました。私がいつでも思い出すのは WFC のスタッフのクリス・カウレイが、見物者のために展示してある戦車に登っては、砲身に花をつけていたことです。時には、原爆でまだ病気に苦しむ被爆者を訪問する機会がありました。多くの人々が、原爆が落ちた時、彼らがどこにいたか、また何を見たかなど、未だに鮮明に記憶しています。私のような子供に体験を話すために、人生のもっとも悲惨な時を思い起こして伝えようとする熱意に、いつまでも感謝の気持ちで一杯です。これら全ての経験が、様々な私の人生を形づくりました。今日の広島は、生命の勝利、死と破壊からの復興の証明です。しかしながら、何が起きたかを決して忘れないということ、また、広島に原爆が落ちたことで亡くなった多くの方々の霊にいつまでも敬意を示すことが何よりも大切であるということには、私の両親も同意してくれると思います。

### ぺあせろべ 2006

10月15日(日)、他の42団体とともにWFCは広島中央公園で開催された第23回ぺあせろべに参加しました。ぺあせろべとは Peace

Love のスペイン語読みで、さまざまの国籍と文化を持つ人々が交流するイベントです。WFCからはたくさんのボランティアが音楽のプログラム(ピースクワイア、ソロ、ハーモニカ、フラダンスなど)を発表して、イベントを盛りあげました。また多数の人がバザー、コサージュ作り、ミニミニ英会話、万国旗クイズ、センターのポスターと写真の展示、資料配りなどを手伝いました。ぺあせろべ委員の河野さん、岡田さん、渡辺朝香さんの優れた企画と多くのメンバーの協力により、21,761円の収益がありました。さらに、WFCが国際交流団体との間に友情の架け橋を築くすばらしい機会を得たことは大変意義深いことでした。

### 国際交流・協力の日

11月19日(日)、広島国際会議場にブースを設け、第7回国際交流・協力の日に参加しました。これは参加者が、講演、写真およびポスター展示、レポート、国際バザールといった発表を通じて異文化を体験するという広島平和文化センター主催のイベントです。私たちの目標は広島におけるWFCの活動をもっと知ってもらうことでした。センターから20人以上のボランティア、英会話クラスの生徒さんが、ポスターや写真の展示、入場者へのパンフレット配布、センターの活動についてのパワーポイント映写などに参加、協力しました。WFCを以前から知っている方々は足を止めて見入り、初めての人はWFCの活動の説明を聞いておられました。ぺあせろべの時と同様、委員の河野さん、岡田さん、渡辺朝香さんの独創的な企画に心から感謝します。

## 谷本清平和賞

11月12日、館長と7名の理事が谷本清平和賞授与式およびレセプションに出席しました。この栄誉ある賞の過去の受賞団体として授与式の後のレセプションでWFCが紹介され、参加した多くの平和団体のリーダーたちと話す機会を得ました。

## クリスマス会

12月17日(日)、恒例のクリスマス会が催され参加者は45名でした。プログラムは聖書のクリスマス話、オー・ヘンリーの有名なクリスマス劇、渡辺朝香さんによるソロ、サンタクロースからのプレゼントなどでした。WFCの活動に献身的に取り組んでおられるみなさんと過ごした特別な一日でした。集まった9,390円の募金はNGO国際医療ボランティア組織AMDAに寄付しました。

## シスター天野の

### フレンドシップアフターヌーン

パリに本部のある援助修道会のシスター天野をWFCに迎えました。シスターは1935年広島市に生まれ、現在広島在住です。1990年アフリカ・チャドへ使節者として派遣され11年間その地に留まり、2001年に帰国されました。

小学生に裁縫・手芸を教え、さらにガールスカウトの活動にも深くかわられました。チャドにいた11年間に彼女はこの不毛の地に住む人々に深い愛情を注ぎました。この貧しい国における彼女の活動についての生き生きとした説明や珍しい写真を用いた彼女の発表はその愛情を物語っていました。

WFCはチャドの子どもたちの教育に献身的に活動された事を高く評価してシスター天野に心ばかりの謝礼を差し上げました。

## ピース・パーク・ガイドの年次報告

ピース・パーク・ガイド・グループは毎月集まり、前月の活動報告をし、次の活動の予定を立てます。この活動がうまくいくように1年間献身的にコーディネートして下さった藤坂容子さんに感謝します。彼女の報告は以下の通りです。ピース・ガイド・グループは2005年8月から2006年7月まで、59回で、223人を案内しました。

公園の案内に加えて、あまり知られていない6箇所の碑について勉強し、旅行者の質問に答えられるようにしました。また、「知られざるヒバクシャ劣化ウラン弾の実態」と「戦争中毒」の2冊の本を読んで学習し、平和公園外の4箇所の碑を実地見学しました。

容子さんのこの一年間のご尽力に心から感謝します。その後は胤森京さんがコーディネーターを引き受けられました。宜しくお願いします。



ドン館長と藤坂容子さん

### 友愛ボランティア

翻訳：佐久間佳子 山下美枝子  
平本隆子 山根美智子 平岡佐知子  
編集：英語版 Don Hess  
日本語版 栗原尚美



ぺあせろべでのバザー



ピースクワイアの練習



国際交流協力の日



シスター天野とドン館長



リトアニアからの訪問団とポーリン



東京からのグループに証言をする松原さん



谷本清平和賞授賞式の参加者



ピースパークガイドのメンバーと館長